

# 第4回生駒市総合教育会議 会議録

1 日 時 平成27年10月20日(火) 午後2時～午後3時57分

2 場 所 生駒市役所 401・402会議室

## 3 協議事項

- (1) 教育関係者への意見聴取
- (2) その他

## 4 市側出席者

市 長 小 紫 雅 史 副市長 山 本 昇

## 5 教育委員会側出席者

教育長 中 田 好 昭 委 員 (教育長職務代理者) 山 本 吉 延  
委 員 飯 島 敏 文

## 6 教育関係出席者

生駒市校長会 会長 朝日野 茂 利  
生駒市自治連合会 会長 藤 堂 宏 子  
生駒市文化財保護審議会 会長 今 木 義 法  
生駒市社会教育委員会 議長 森 岡 伸 枝  
生駒市スポーツ推進審議会 会長 池 田 誠 也

## 7 関係職員及び事務局職員出席者

教育総務部長	峯 島 妙	生涯学習部長	奥 畑 行 宏
こども健康部長	上 野 和 久	教育総務課長	真 銅 宏
教育指導課長	吉 村 茂	学校給食センター所長	奥 田 茂
生涯学習課長	西 野 敦	図書館長	向 田 真理子
スポーツ振興課長	杉 浦 弘 和	こども課長	吉 川 和 博
教育指導課課長補佐	吉 川 祐 一	生涯学習課課長補佐	錦 好 見
スポーツ振興課課長補佐	黒 松 裕喜伸	教育総務課 (書記)	松 井 恵

## 8 傍聴者3名

○開会宣告

○協議事項

(1) 教育関係者への意見聴取

小紫市長：本日は、教育大綱の策定にあたり、教育課題の方向性について各分野代表の皆様にヒアリングをさせていただく。教育課題といってもいろいろな切り口があると思うが、それぞれの立場から忌憚なくお話しいただきたい。また、大綱の柱としている「社会で活躍できる人材」についても触れていただけると有り難い。

朝日野会長：校長会長として、本日は本校（俵口小学校）の取組を中心に意見を述べる。

本日公表された学力・学習状況調査の結果でも、生駒市の学力は全国平均を上回っている。生駒市の子どもたちは、やるべきことをきちんとやろうとする子であると思う。教員も、児童に身に着けさせるべき基本を丁寧に教えようと努力している。

私が今後求められると思う教育は、多様性に対応する教育、多様性を生かす教育である。

その理由として、第一に、子どもが抱える課題そのものが多様化しているという現状がある。対人関係・コミュニケーションの課題、注意力・集中力の課題、興味・関心の偏りの課題、言語理解の課題、身体面で配慮を要する課題など、多様な課題を持つ子どもが年々増えており、それぞれのニーズに対応した支援をいかに進めるかが問題である。本校の取組としては、どの子にも理解できるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業のために、教材研究と教材作りに時間を割いている。また、授業の中で一人一人が課題に取り組む時間を組み込み、個々の指導にあたる授業プランを立てている。さらに、子どもの課題や具体的な対応について教員同士で共通理解を図るため、積極的なミーティングを行っている。しかし、対応が難しい部分もあるので、子どもたち一人一人が持つ可能性をより伸ばすためには、人的な配慮も必要である。

第二に、次期の学習指導要領にも挙げられているアクティブラーニングを進めるために、多様性に対応した教育が重要である。学力学習状況調査の中で、生駒市が全国より10ポイント下回っていたのは、「自分で課題を立て、情報を集め、調べたことを発表する学習に取り組むこと」であった。これはまさにアクティブラーニングに対応する項目である。情報を集めて調べたことを発表する学習はどの学校でも実践しているはずであるのに数値が低いのは、子どもがそれを主体的な学習と思えてい

ないからではないかと思われる。特に必要となるのは、学びのスタートとなる子どもの課題発見、学びを推進する力となる動機や意欲付けに関する取組を進めることである。そのためには、ひとつの枠に納めず多様性に対応した教育が重要である。

第三に、生駒市では「勉強は大切だ」という子どもは多いが、「勉強が好きである」という子どもは少し減るという結果についてである。本校では、「自己有用感」をキーワードとしている。これは、人の役に立ったときとか自分が必要とされたというときに得られる自己認識である。この言葉は、平成23年に文部科学省国立教育政策研究所が出した「いじめ・不登校を減らすヒント」という冊子で見つけたものである。自己有用感を高めることを学校の重点課題にして取り組む中で分かってきたのは、子どもたちは自分が必要とされた、人の役に立ったと実感したときに学びの意欲や探究心が高まり、人と関わりたいという規範意識も高まるということである。自己有用感とは、他者からの評価に基づく自己認識であるので、自己有用感を得るためには人との関わりが必要となる。本校では、異年齢の縦割り活動や地域の方との交流活動に取り組んでいるが、単なる交流ではなく、一人一人が工夫や努力をするように考えさせ、教員がそれに沿った支援を行い、頑張りを認めることで、子どもたちは自己有用感を実感し、もっと能力を高めたい、もっと人と関わりたいという意識を高めてくれた。このように個々の子どもの多様性を生かす支援によって、交流活動が生きてくると感じている。学校の中で取り組んでいる教育活動を振り返ったとき、一人ひとりが自分の良さや持ち味を伸ばすことができること、人のために役立つ喜びを実感し、それをモチベーションに自ら学び考える力を育てることが、社会の中で活躍する子どもを育てることになると思う。

以上のことから、多様性に対応する教育、また多様性を生かす教育を、大綱に盛り込んでいただければと思う。

飯島委員：アクティブラーニングについての対応の中で、子どもたちが学校の学習を主体的学習と認識していないのではないかという発言があったが、子どもたちが主体性をどのようなものとして捉えているかについて、子どもたちの言葉として出てきているか。

朝日野会長：アクティブラーニングについてはまだ取組が不十分だが、子どもが主体的に学べたと実感するときは、自己有用感を得られる場面であると思う。目的意識や相手意識をしっかり持って、相手が喜んでくれたと感じることが重要であると思う。

飯島委員：具体的な場面としては、例えば総合的な学習の時間のグループ活動の中で、自分の役割を果たせている、自分がいないと上手く回らないと子どもたちが感じているということか。

朝日野会長：その点とは少し異なり、総合的な学習の中で子どもが課題を設定するときに、相手意識や目的意識をいかに持てるかで学びの意欲が変わると思う。

山本委員：何点か質問がある。

一つ目に、多様性に対する教育が必要であるとの意見の中で、以前より子どもたちの多様化が進んでいるとのことであったが、その背景にあるのは何であると考えているか。

二つ目に、アクティブラーニングが盛んに論議されている中で、一人一人が主体的・協働的に体験することがアクティブラーニングのベースにあるにも関わらず、生駒市や奈良県の学力学習状況調査の結果を見ると、理科の実験の実施率が低い。理科の授業で実験をしようと思えば実施できるのではないか。

三つ目に、自己有用感が大切であるという意見には同感であり、子どもたちには自尊感情を身に着けさせたいと思う。そのために評価の方法が重要とのことであるが、実際に学校での評価が自己有用感につながるような評価になっているか。できていないところをクローズアップする評価に陥りがちではないか。学校として、自己有用感という視点から評価についての考えがあれば教えていただきたい。

朝日野会長：まず、多様性の背景には、人間関係の希薄さや地域との関わりの脆弱化があると思う。以前は公園などで上級生や下級生と触れ合う中で、上級生に憧れを持ったり、下級生の面倒を見たりという育ちがあったと思うが、今はその様な場面が少なくなっている。

次に、理科の実験に関して、例えば、今回の学力・学習状況調査において「顕微鏡がぼやけているときどうするか」という問いの全国の正答率が4割弱であった。この背景には、実験器具の数の関係で一人一人がすべての工程を経験せずに実験が終わってしまうことや、効率的に授業進めなければ、時間内に単元を進められないことがある。本校では、通常1時間に設定されている振り子の実験を、児童の理解を促進するために時間数を増やす工夫をしているが、そうすると他の授業数を減らすというやりくりが必要になる。

最後に、自己有用感を感じさせるための本校の取組として、以前は活動の評価を一斉評価で終わらせることがあったが、それでは児童の心に響かないことが分かったため、学習の振り返り際には一人一人の子どもの狙いに対応した評価に努めている。

小紫市長：個々の力を引き出すためにさまざまな活動をされていることと思うが、それを子どもが発表する場をどのように設定しているか。

また、多様性に対応した教育について、具体的な実践例はあるか。

朝日野会長：本校では、「話す」、「書く」という活動を重視している。子どもにグ

ループで話し合わせ、その振り返りを書かせる形でアウトプットをしている。

また、多様性に対応した教育については、生駒市が独自に行っている特別支援教育の支援員制度を有効に活用している。しかし、現状では配置人数がまだ十分ではなく、予算の問題もあると思うが制度の拡充を希望する。

小紫市長：支援員は、障がいを持つ子どもや成績が振るわない子ども、外国籍の子どもなどへの支援を行うのか。

朝日野会長：発達障害を持つ子どもに限らず、学習や生活に援助の必要な子どもを支援している。

藤堂会長：自治連合会の会長として、地域の立場から意見を述べる。

私は、教育について考えるときに、学校内の学習ももちろん重要だがそれだけでは不十分だと思う。子どもたちは、地域、家庭、学童保育などの様々な場面で人と関わることになるが、地域の間関係の希薄化や異年齢交流の不足により、子どもたちが地域の中で人間として成長するのが困難な時代になってきている。

生駒市には127の自治会があり、児童の見守り活動やボランティアなどさまざまな活動を行っているが、その中で感じるのが、「子どもは守られるべき立場で、大人は何かをしてあげる立場である」という線引きがあるのではないかということである。しかし、地域の役割は必ずしもそうではなく、子どもたちが主体的に地域に関わってアクションを起こせるように育てることである。自分は地域から守られるべきものであるという視点で育つと、大人になって社会に出たときに地域は過去のものになってしまう。子どもたちには、地域の一員としての自覚を持ち、大人になって地域に還元する立場になれるような人間に育ってほしい。そのためには、学校と連携して、子どもたちにも地域の活動に主体的に参加してもらう必要がある。例えば、地域の大掃除に参加したり、学校の掃除の範囲を地域まで広げたりすることはできないか。

また、先ほど異年齢で遊ぶ機会が少なくなっているという意見が出たが、私が生駒警察署の少年補導員として誘拐被害防止の紙芝居をした保育所の中に、3・4・5歳児の教室の仕切りがなく1つのフロアで保育していた園があり、このような工夫により異年齢間の交流も可能になると思う。また、奈良県の派遣事業でフィンランドの学校を訪問したとき、子どもたちには強い自尊感情があり、尊敬する人は両親と答える子が多く、日本との違いを感じた。また、以前個人塾で勉強を教えていた時に、分からない子がいればほかの子が教えてあげる光景があったが、最近は減ってきたように思う。

また、自治会として地域防災訓練を実施しているが、学校と地域の連携をより進めたいと考えている。学校は避難所として防災の基盤となっているが、以前は、学校は一步引いた姿勢だった。最近ではより連携をとれるようになってきたが、今後はより連携を深め、できれば学校で実施する防災の取組に地域も参加することが望ましい。このような実用的な面での学校と地域の連携を望む。

小紫市長：地域は子どもたちを守るだけでなく、子どもが地域に貢献する場づくりが大切であるとのことである。地域の中で子ども自身が社会に対する自分の責任を学ぶことが大切であると思う。

また、例えば廃品回収などでは一定の収益が上がっていると思うが、そのような活動に子どもが参加することで、努力した分稼ぐことができるという社会教育につながると思う。

最近子ども会などの地域活動が少なくなったようであるが、地域の活動をより魅力的にするための工夫等はあるか。

藤堂会長：今の子どもたちは、塾や習い事など様々な活動が多く、地域の活動に参加しにくくなっている。しかし、興味があるものには積極的に参加してくれる。例えば、生駒市と協働でコミュニティパーク事業を行った際は、木を切ったり枝を切ったりという体験活動を親子ともに楽しそうに参加してくれていた。

今木会長：文化財保護審議会の会長を務めている。本日は、私自身の体験談をもとに意見を述べる。

14年前、生駒の歴史文化の講座を行った後、アンケートで参加者に参加動機を問いかけた中で、次のような回答があった。『自分は他府県から生駒市に移り住んだが、生駒で生まれた我が子にとっては生駒が故郷である。子どもを育てる上で、私自身が生駒の歴史を学びたいという気持ちになった。自分の暮らす地域の歴史文化を学ぶことはとても大切なことだと思う。』という内容であった。私は、自分の地域の歴史文化を大切にしない社会には明るい未来は期待できないと思う。歴史文化講座は15年間開催したが、市民の関心が高く、毎回定員を超える応募があった。生駒市は歴史文化を学ぼうというニーズが高いのではないか。

また、平成19年から3年間行った人権教育リーダー養成講座で、「行基の生涯と竹林寺」という話をした際の感想文を見て愕然としたことがある。参加者の半分が、私の講座を聞くまで竹林寺に行基の墓があると知らなかったからである。また、約7割が竹林寺に詣でたことがないとのことだった。民俗文化の調査で他市に行くと、半数くらいの方が生駒市と聞いて行基の墓のことに触れるが、肝心の市民の認識が低いのは問題である。

また、一昨年と昨年、壱分小学校の3年生を対象に生駒の歴史についての話をした。講座の後、校長先生に、日常授業の中で生駒の文化を教える機会が持てないかと聞くと、生駒で育った教員が少ないため難しいとのことであった。先生方にはまず生駒の歴史文化を学ぶための研修の機会を設けてもらえれば、より裾野の広い指導が可能になるのではないかと思います。

昨年2月にふるさとミュージアムが開館した。しかし、高齢の方には駅からミュージアムまでの坂道が大変であるとの声を聴く。コミュニティバスを運行するなどの具体的な利便を測っていただくようご検討いただきたい。そういった地道な活動こそが、市民の故郷意識を高め、生駒市の活性化にもつながると思う。

中田教育長：県の学力・学習状況調査結果にも、生駒市は奈良県に比べて郷土意識が強いという結果が出ている。郷土愛と社会で貢献できる人材は結びつく部分もある。大綱にも、郷土愛の部分が入ってくると思う。

小紫市長：郷土意識の中には、歴史文化に対する誇りや、生駒のまちや自然が好きということも入っていると思う。

社会科の先生を中心に作成いただいている小学校の社会の副読本がある。生駒には、行基、宝山寺、生駒トンネルなどの歴史的に大切なでき事が多く、小学生が読んで楽しめる内容も多いと思うので、今後そのような内容を盛り込むなどして、子どもたちが歴史文化を知るための工夫ができるのではないかと。

森岡議長：私は県下の大学で教えてきた経験から、大学生の変化と生駒市の状況を照らし合わせて意見を述べる。

まず、学生が社会に出ていくときの社会貢献に関するリアリティが年々欠けてきていると感じる。私は保育士になろうとする学生を育てているが、学生たちは子育てや子どもに興味がなく、自分にリアリティのある年代にだけ興味を持っていることに危機感を覚えている。例えば、性感染症が増加している要因として、性に対する知識不足や親になることについての認識不足が挙げられる。また、文部科学省の家庭教育手帳には、理想についての記述はたくさんあるが、子どもを育てるのにどれだけの費用がかかり、どんな苦勞があるというプロセスの記載がない。結論としては、学生が子育てをよりリアルに意識し関心が向くように、市の政策で子育てについて学ぶチャンスをいただくとともに、学生をもっと市の活動に活用していただきたい。

次に、生産人口が減少し高齢人口が増加している中で、子育てしやすい環境が大切であると思う。私は発達障害を持った子どもの支援に興味ある。生駒には生活支援センターあすなろという素晴らしい取組があり、

発達障害を持つ子どもへの支援を積極的に行っている。しかし、奈良県の発達支援が十分でないために、生駒市に発達支援を求める家庭が集中し、あすなろの活動が手薄になってきたという話もある。また、生駒市のハートフルプランでは、発達障害の子どもの早期のスクリーニングが不十分であることが分かっている。県に働きかけ協力関係を築き、発達障害を持つ子どもの支援をしていただきたい。最近では、各大学に学習障害支援センターが増えてきており、子どもに発達障害を見過ごされて、現在大学に通っている学生の支援を行っている。また、保育所の先生方に聞くと、クラスに平均1人は発達障害の子どもがいるというが、そういった保育現場への支援もあすなろだけでは難しいと思う。また、学童保育では、障がいを持つ子は入所を拒否される例もあると聞くが、その点も今後改善していただきたい。最後に、保育所や幼稚園の入園に当たっては、障がいを持つ子の入園は3件断られて当たり前という状況があるそうであるが、受け入れられる園をリストに記載するなど、保護者が傷つかないような工夫をお願いしたい。

中田教育長：幼稚園の特別支援の対応については、正式に発達障害と認定されていないグレーゾーンの子どもを含め障がいを持つ子どもの支援に対して人的配置を行っている。また、私の認識では障がいを持つ子どもの入園はお断りしていない。

小紫市長：私は、発達障害を持つ自分の子どものことで、一人の父親として生駒市に大変お世話になった。幼稚園の先生方も知識や経験が少ない中でも、大変よくしていただいた。

確かに森岡議長がおっしゃるように、あすなろや言葉の教室があるから生駒市に転入する方がいるという話も聞く。あすなろは、障がい者手帳を持っていない障がい者予備軍まで受け入れを行っており、重度から軽度の障がいを持つ子どもまで手厚く対応されている。

生駒市では、障がいの早期発見と早期療育のために集団検診を始めた。また、成人の発達障害も問題になっているので、今後、成人のスクリーニングにも対応したい。また、障がい原因の児童虐待等に対しても予防や支援を行いたいと考えている。

また、親になる意味を考えることの大切さについても言及いただいたが、その実例や成果などをお聞かせいただきたい。

森岡議長：例えば、アメリカでは家庭科に対する考え方が日本と違っており、親になるにはメンタル面での強さが必要であることや子育てに必要なお金の計算など現実的な話を子どもたちに伝えている。日本でもこのような教育を取り入れる動きがあり、高校の家庭科の授業の中などでの導入が始まっている。

私は大学で保育の専門科目を教えているが、大学の授業には理想を語る

ものが多いと感じる。現実的な困難にぶつかったときの対処の仕方や親になることの難しさを教えたいと思っている。

小紫市長：現実的な問題を伝えることは重要である。また、親の大切さや親への感謝の気持ちを表すことの大切さをしっかり伝えることも、規範意識を身に付けさせる意味でも大事なことであると思う。

池田会長：スポーツ推進審議会代表として、社会で生き抜く人を育てる教育を実現するための提案をする。

まず、地域のスポーツ団体や民間スポーツクラブとは異なり広域的な存在である総合型地域スポーツクラブを活用することが大変有効であると考えられる。なお、総合型地域スポーツクラブの推進は、国、県、市の計画でも重要施策の一つとされている。

総合型地域スポーツクラブとは、多世代・多種目・多志向に渡ってそれぞれの嗜好レベルに合わせて行うことができ、身近な地域でスポーツに親しむことができる新しいタイプのスポーツクラブで、地域住民により構成され、会員の会費で運営を行っている。現在生駒市には、サッカーを中心として様々な活動を展開する「特定非営利活動法人プロストリート関西」、一般財団法人生駒市体育協会の事業として運営する「いこマッスルクラブ」、緑ヶ丘中学校区を活動拠点としている「リトルパイン」の3つの総合型地域スポーツクラブがある。

以上の3クラブが学校や企業、その他の団体と協力・連携した主な取組として、学校との連携事業、トップアスリートや民間企業との連携によるスポーツ教室、親子や地域の方々とともに楽しむスポーツ活動、その他地域住民や各種団体と連携した婚活イベントなどを行っている。その中で、テーマである「社会で生き抜く人を育てる教育の在り方」を考えるに当たり、スポーツ推進審議会としては、総合型地域スポーツクラブと学校との連携事業を今後もっとも進めたい。

学校との連携事業には、学校部活動への指導者派遣事業と地域住民との交流事業の2つの事業がある。

生駒市では平成26年度から総合型地域スポーツクラブと学校との連携事業のモデル地域として、市内2つのクラブが指導者派遣事業と交流事業を実施している。平成26年度の事例としては、いこマッスルクラブが上中学校の卓球部への指導者派遣を行い、その成果として、以前はほとんど勝てなかった卓球部が県中学校総合体育大会において部員全員が個人戦2回戦進出、団体戦でも活躍した。平成27年度も引き続き指導者を派遣している。他にもいこマッスルクラブが上中学校ソフトボール部へ、リトルパインが緑ヶ丘中学校ソフトボール部へ指導者を派遣している。

地域交流事業としては、学校施設という子どもたちにとって安全で安心して利用できる環境でスポーツ教室やイベントなどを行うことにより、従来の子どもだけが参加した単一種目のスポーツ活動とは異なり、親子や地域の方とともに楽しんで活動を行うことができている。平成26年度はリトルパインが緑ヶ丘中学校でサーキットトレーニング教室を実施した。平成27年度はいこマッスルクラブが上中学校でウォーキングイベントを、リトルパインが緑ヶ丘中学校でサーキットトレーニング教室とバランスボール教室を開催する予定である。

現在の課題は、全国的に見て総合型地域スポーツクラブの認知度がまだまだ低いということである。健全なクラブ運営に必要な会員数が伸び悩んでおり、また学校をはじめとする様々な団体との連携等が進まない状況である。今後は、本市のスポーツ振興の中心となることが期待されている総合型地域スポーツクラブが、地域住民にとって最も身近な公共施設である小中学校と協力・連携し、学校施設を活動拠点としてクラブの運営を進めていくことで、スポーツ活動を通して子どもたちが地域の方と触れ合い、社会で生き抜く力を育てていってもらえれば大変有り難い。そうすることで、学校に通う子どもたちを地域で見守り育てていくという意識も高まるのではないかと考える。また、総合型地域スポーツクラブを活用し、学校のクラブ活動に専門性を有する指導者が関わることにより、子どもたちの体力向上に寄与することも十分可能であると考えている。以上のことから、総合型地域スポーツクラブは、学校を中心として地域全体を結びつけることができると考えている。

中田教育長：部活動への指導者派遣について、9月から大阪市が民間のスポーツクラブに派遣業務委託を始めたとの報道があったが、指導者派遣に当たっては生徒指導と技術指導の住み分けが必要となる。現在も上中学校などに指導者を派遣していただき大変有り難く思う。学校としては、いつも同じ方に指導していただいた方が安心であるが、派遣いただける人材は同じ方か。

池田会長：指導者は体育協会の専門指導員であり、同じ指導員が派遣されている。また、指導者派遣事業以外のイベントなどでも、指導者と学校が交流している。

今後、他校でもより一層指導者を受け入れていただければ有り難い。

小紫市長：スポーツが教育において大切であると思う点は何か。

池田会長：スポーツには必ずルールがあるため、スポーツを通して規範意識が育つ。また最近では、スポーツができる子どもは学力も高いという傾向がある。体力があれば勉強も頑張ることができるのではないかと考える。

小紫市長：生駒市は全国平均と比較して学力も体力も高い。スポーツを通して得た自己有用感が勉強面でプラスになる場合もあると思う。自分を評価して

もらえる場があれば、他の分野でも頑張ることができるのかもしれない。

池田会長：自分に自信を持てれば、その分頑張ることができる。また、競争して勝てば自分に余裕ができ、多方面でも頑張ることができると思う。

小紫市長：多方面にわたり、さまざまなご意見をいただいた。全体を通して、質問等はあるか。

山本委員：藤堂会長、今木会長、森岡議長のお話にあったように、教育というと学校教育の果たす役割がやはり大きい。そのため、学校教育においても社会で生きるという意識をもたす教育が重要である。子どもたちには、自分が社会の一員であるという意識や生駒で生活しているという意識が低いのではないか。自分が生活者であるという意識も持たない限り、社会との関わりは持てない。生駒で生きているという意識を子どもに持たすために、一步踏み込んだ話をお聞かせいただきたい。

藤堂会長：親にとっては、子どもは勉強をしていれば良いという考えを持ってしまいがちであるが、家のお手伝いや近所の掃除など身近なことを子どもに責任を持ってさせることが必要であると思う。併せて、小さいころから政治にも関心持ってほしい。選挙権年齢の引下げの話もあるし、自分の一票が社会にどのような影響を及ぼすのかを学ばないと、責任を持った行動ができないと思う。現実にある身近な話を教室に持ってきて、自分の意見を発表する機会があると良い。先生方にとっては白黒つけ難い課題もあるかと思うが、子どもの考えでやらせてみても良いのではないか。

中田教育長：9月市議会でもシティズンシップ教育について質問があった。これはワークショップやディベートなどの手法で市民としての資質・能力を育成するための教育であり、すでに取り組んでいる市町村もあるようである。家庭と地域との連携や学校現場と地域の取組や課題についても議論していただきたい。

朝日野会長：今の子どもたちの中には、人と関わりたいという意識を持っている子が少なく、それに伴い社会性や規範意識も希薄になっている。本校でも人との関わりという基盤の部分膨らませたいと考えており、縦割り活動による1年生から6年生の交流を行っている。また、地域との交流については、民生児童委員の方や老人クラブの方との交流を行っているが、活動はあるが学びがないという状況にならないよう、目的意識を持たせるなどの支援が必要である。

小紫市長：若い世代は、面白いと思ったことには自発的に参加する。自分たちで活動の場を切り開いてくれるのが一番であるが、そういったきっかけを与える場づくりに関して、市ができることもあると思うし、学校や地域の腕の見せ所でもある。

また、議論の中で多様化というキーワードも出た。いろいろな人がいて

いろいろな価値観があるということを相互に尊重し合うことが大切である。子どもたちには、答えがないことをあえて議論したり、日常生活で経験できないことを体験したりすることを通して、多様な考え方や価値観を知ってほしい。

飯島委員：異年齢の交流が少なくなっているという話があった。私自身の経験でいうと、子どものころは学級内の交流が基本であり、異年齢の交流は兄弟やその友人くらいであった。しかし、父の世代の交流の基盤は近隣の異年齢の集団であった。その集団の中で、強いものに頼ったり弱いものを守ったりするという人としての役割を自然に身に付けていたのではないか。

最近では、小学校で6年生が1年生の面倒を見るような活動が出てきており、地域でなくなってきた異年齢の関わりを学校が補完する機能を果たしていると感じる。社会で失われてきた価値ある習慣を、学校で経験できるという機会を役立てるべきであると思う。

小紫市長：家庭機能の低下を地域や学校が補完できる部分もあると思う。

藤堂会長：最近の子どもは外で遊ぶ機会が少なくなっており、スポーツチームや習い事などの運動の場を設けて体を動かしている。昔は近所で走り回ったりボール遊びをしたりして多方面から体を使ってバランスよく発達していたのが、特化したスポーツ教室に行くことにより偏った発育が見られるという話がある。小さいころは特定のスポーツではなく普通に遊ぶということが大切であると思う。外遊びの減少の要因としては、誘拐などの危険があるため子どもだけを外で遊ばせにくいという環境がある。

小紫市長：いただいた意見を大綱に生かしたい。また、大綱だけでなく、今後さまざまなところで形にし、生駒市の子どもたちはもちろん広く市民の方々が教育を通じて楽しく過ごしていくことが最終目標である。その実施段階でも、皆様にご協力をいただきたい。

## (2) その他

教育に関する「たけまるワークショップ」及び総合教育会議のスケジュールについて、教育総務課、真銅課長から説明

(質疑) なし

## ○閉会宣告

午後3時57分閉会